

譲り、十三年又本泉寺を蓮悟に興へた。而して反故裏書に、『緝如上人越中岡井波と云處に一字建立、瑞泉寺と號す云々。存如上人の時弟如乘と申をはじめて下し住持せしめ、是も元は背蓮院の御門弟聖光院の僧侶也。如乘彼國より加州へ越、二侯といへるに一字を建、其跡に蓮如上人の次男蓮乘法師を申うけ、則瑞泉寺と兼住せしむ。後には本泉寺と號す。是若松の初め也。』とあるによつて案ずるに、蓮乘は初め二侯本泉寺に居り、之を蓮悟に譲つた後若松に移つたが、若松は本泉寺の隱居であつたから、別に寺號を定めることもなく、是をも若松本泉寺と呼んだとの意であると見え、その地金澤御坊を距ること近くして、往復の便利あるが故に、後に蓮悟も二侯に在るよりも若松に住する日多く、隨うて實悟記に記される如く、遂には若松坊・若松蓮悟若しくは若松本泉寺蓮悟と呼ばれることになつたものと思はれる。拾遺記に、若松本泉寺を長享元年蓮悟の開創とするものは、その頃から蓮悟が同寺に住したとの意味でもあらう。二侯本泉寺には、その坊側に草舎があつたが、越前荒川興行寺玄眞の三子兼慶がそれに寄寓して居り、その子俊助、その子頼乘尙監主として住し、頼乘の寂後越中瑞泉寺佐乘の子心祐入つて再び本泉寺を興し、法悟・榮悟・刑部卿三世の後統を斷ち、觀悟といふ者之に次いだ。又若松本泉寺の堂宇は、確證はないが、享祿四年蓮悟の一小一揆に迫はれて能登に逃走した後、破壊せられたのであるまいかと思はれる。↓セントクジ 專徳寺。

**ホンセンジ 本泉寺** 鳳至郡南なる本誓寺文書七月一日附佐脇美濃守綱隆等の執達狀

に、宛名を鳳至郡本泉寺と書いたものがあ

る。この本泉寺は本誓寺の譌である。  
**ホンセンジ 本仙寺** 前田利光(利常)年不詳十一月九日附その他の文書に、本仙寺に宛てたもの、あるのは、石川郡松任本誓寺を字音によつて誤つたものである。

**ホンセンジ 本善寺** 江沼郡大聖寺鍛冶町に在つて、眞宗東派に屬する。寺記に、文明中宗授本郡敷地村に勝覺寺を建てたが、慶長中十代了齋の時本善寺と改め、後寛永年間に今の所に移つたとし、諸家分派系圖には、勝覺寺了齋の子榮元(寛永十一年得度)を當寺の開祖とする。當寺の梵鐘の銘に後藤才次郎定次の名があつて問題とせられる。↓カネ 鐘。

**ホンソウジ 本藏寺** 金澤上小川町に在つて、日蓮宗に屬する。山號は遊四方山。元和八年河北郡車村寶乘寺十九代日蓮の同地に創建した所で、文政五年今の所に移つた。  
**ホンソウルイホウ 本草類方** 廿一冊。坂元慎著。本草の諸書を涉獵し、類を以て庶物を抄出したもので、便覽の用に供したのである。河合良温の序文が附される。

**ホンダアハカシブコウシヨ 本多安房家士武功書** 一冊。本多安房守家士一統の武功を書き出さしめた申状を集め、末に惣人數都合六百六十二人元和二年十二月十八日本多安房守政重とある。

**ホンダウチ 本多氏** (一)世系—慶長十六年本多正信の子政重が前田利長に仕へて三萬石を受け、十九年加増して五萬石となつたに起り、政長・政敏・政賢・政昌・政行・政成・政融・政和・政通・政均・政以相傳へて、明治に至るまで常に加賀藩臣中の最大右族であつた。後

明治三十三年五月政以の時華族に列し、男爵を授けられた。  
(二)邸第—本多政重が、慶長十六年來仕した時には、後の小立野波着寺の地を賜はつたが、その後兼六園外の西南方に當る舊太田長知の邸地を受け、以て藩末に及んだ。然るに明治二年十一月前田慶寧は金澤城を出で、本多政以の邸をその居館に當て、次いで四年八月東京に移住した後建物を毀ち、邸地は舊の如く本多氏の有となり、十九年五月陸軍省の用地となつた。  
(三)下邸—今の本多町で、もとは石浦村の地であつた。本多家記には元和元年之を拜領したと記し、延寶の金澤圖に本多安房下屋舖とし、元祿・享保頃の記録には安房殿町と載せらる。この下邸は數萬歩に亘り、家祿五萬石の従士を一ヶ所に集めて、宛然小諸侯の觀があつた。明治二年十一月前田慶寧が本多政以の上邸に徙つた時、政以はこの下邸内にある別邸に轉じた。

**ホンダカシンノクシユウ 本多家臣の復讐** (一)志士の結束—明治二年八月執政本多政均を暗殺した山邊沖太郎・井口義平が刑獄寮に收容せられた時、政均の嗣子資松(後政以)の臣僚百四十名は、その家老を動かして加害者を交付せられんことを歎願する爲、九月廿七日書面を政事堂に提出し、爾後屢之を繰返したが藩廳は許さなかつた。既にして四年二月廿二日沖太郎等の刑將に決せんとする風聞を得たので、本多彌一等は之が劊手たらんことを請うたが、亦徒に諭示を得るのみであつたから、遂に十四日刑獄寮に闖入して彼等を奪はんと謀つた。しかも二兇はこの日早

朝既に自刃の刑を終つて居た。是に於いて多數舊臣の勇氣頗る沮喪するに至つたが、唯本多彌一・矢野策平・西村熊・鍋木勝喜知・富田總・舟喜鐵外・淺井弘五郎・吉見亥三郎・芝木喜内・廣田嘉三郎・湯口藤九郎・藤江松三郎・清水金三郎・島田伴十郎・上田一二三の十五人のみは終始志を變せず、仇敵の殘黨を討つて舊君の恨を晴らさんと腐心した。  
(二)仇敵の所在—この時仇敵の殘黨たる菅野輔吉は自宅禁錮中であり。岡山茂は閉門を終つた後郷を去つて行く所を知らず。岡野佛五郎・多賀賢三郎は金澤縣の少屬に擧げられ、石黒圭三郎は再び東京に去つて踪跡を隠した。是を以て同志は屢會合して熟議を重ねたが、十一月十六日多賀賢三郎が大關草薙尙志と共に關西に出張するとの報を得るに及び、廿三日各方面同時に事を擧ぐるに決し、十八日芝木喜内と藤江松三郎は賢三郎を追跡し、島田伴十郎と上田一二三とは石黒圭三郎を襲ふ爲に東京に向かひ、殘餘の者は金澤に留つて菅野輔吉と岡野佛五郎を討つことにした。  
(三)復讐決行—明治四年十一月廿三日同志本多彌一・鍋木勝喜知・富田總・吉見亥三郎は、金澤長町に在つた金澤藩廳から岡野佛五郎の退下するを待ち、高岡町殿内に尾行し、彌一先づ之と戦うて手に微傷を負うたが、佛五郎が溝中に落つるに乗じて總等と共に之を刺し、直に藩廳に至つて自首した。この際同志の一人清水金三郎は、走せて小立野に赴き、菅野輔吉襲撃の一隊に之を報告する任に當つたが、矢野策平・西村熊・舟喜鐵外・淺井弘五郎・廣田嘉三郎・湯口藤九郎は輔吉の家に向かふ途に於いて報を得、乃ち金三郎をして門前